

## 第6学年国語科における「意味と内容」のひろがり

6年C組 志場 俊之

### －「海の命」の学習を通して－

#### 1. 子どもに対するねがいと学習指導のねらい

##### (1) 一年間の国語科学習の中での子どもに対するねがい

将来の夢や抱負、生き方について、じっくり考える機会を持ちたいと考え、「生きる」ということをテーマにして、一年間の国語科学習を計画した。

扉の詩「創造」(何でも自由になった今の時代を見つめなおし、自分で創り出していく力を呼び起こそう、自分の未来を自分の力で切り開いていこう)「森へ」(自然の力を認識し、過酷な環境の中で生きている植物や動物のすばらしさを知ってほしい)「やまなし」「イーハトーヴの夢」(宮沢賢治の自分のことよりもみんなのことを大切に思う気持ちや、人間も動物も植物もお互いの心が通い合う世界が理想という生き方・考え方を自分の生き方に生かしてほしい)「あいたくて」(自分が何をすべきなのか、今の自分はどんな自分か見つめてほしい)「ヒロシマのうた」(もっとも強く作品が語りかけてきたことを交流し合うことで、その感想の違いがどこからきているのかを意識し、お互いの感じ方の違いを明らかにし、認めていくとともに、ヒロ子の強く生きていく生き方を通して、自分の生き方を見つめる機会としてほしい)「平和のとりでを築く」(平和を守ろうとする人々の生き方に関心を持ってほしい)「きいちゃん」(障害を持った子のひたむきな生き方を通して、人を偏見で見ることなく自分の生き方・考え方に役立ててほしい)「生きる」(これからの自分の生き方を考えていってほしい)

このように、一連の「生きることについて考える」単元や教材を通して、学習対象に迫るとともに、子どもたちに、生きるということはどういうことか、これからどのようにして生きていくのかという考えを持たせたかったのである。

##### (2) 学習指導のねらい

主人公のあり方を行動や言葉から分析し、「主人公はどのような存在なのか」といった教材の中での読み取りから得たものやことを自分に返していくことを従来の読みとするならば、時には自分という存在をもっと前に出して、主人公の生き方やものの見方・考え方とも比べながら、自分の生き方を考えられるような単元を計画したいと考えた。言いすぎかもしれないが、自分のこれからの生き方、ものの見方・考え方を決める一つの指針として教材の中の主人公の生き方・考え方があり、他のいろいろな教材があるというような教材との関係を考えている。そうして、主体が自分であり、友達であり、学級であるような、教材を通して自分たちがどんなことを学んでいくかということ大切にしたいと考えたのである。その中で、「海の命」をはじめとした立松和平の作品を通して「生き方について考える」単元では、いろいろな人のいろいろなひたむきな生き方・考え方を学びながら、自分の生き方・考え方を見つめさせていきたいと考えたのである。

#### 2. 6年生の子どもがとらえた「意味と内容」

この単元で扱う物語「海の命」には、海という自然を舞台にした主人公太一の成長の姿が描かれている。太一の少年時代から壮年になるまでの生涯を、6つの場面構成で描いている。その6つの場面を一つ貫いているのは、父や与吉じいさが生きた海に寄せる太一の熱い思いである。

漁師になる夢、父といっしょに海に出る夢を持ち続けてきた太一。幼いころから父を尊敬し、父の生き方に触れながら育った太一にとって、父が亡くなった後も、父という存在がその後の太一の生き

方や行動に大きく影響を与えている。

そこで、太一の思いと父の思いを比べ、似ているところや違うところを見つけ、自分の考えも織り交ぜていく学習を考えたのである。

#### ・父の思いはどこを向いているか。

**海**子どもたちは、海に向いているという事を第一に主張した。父の死を考えるのなら、クエを第一の思いにあげると思ったが、海に感謝していることが一番重要と思ったのだろう。「海のめぐみだからなあ。」という言葉に代表されるような気持ちを子どもたちは感じ取ったのかもしれない。「別に父さんの力じゃないんだよ・・・」と続くと思う。すべては海の命のおかげと言っていると感じ取っていた。自分が生きるために魚をしとめてきたというより、しとめさせてもらったというような、海に対しての感謝の気持ちを持っていると解釈したのである。「不漁の日が十日間続いても、父は少しも変わらなかった。」というところにも魚を取る事が目的ではなくて海で生活する事を第一に考えている事を感じ取っていた。

**クエ**向いているかどうかははっきりとは限定できなかったが、2メートルもある大物をしとめても平然としていた父がロープを体に巻いたまま水中でなくなっていた事に対して、夢中になったからこそロープをほどかなかったのだと考えた。ロープを体からははずすことはできたはずなのに、それをしなかったし、絶対にあきらめないという気持ちがあったから、水中でなくなったのだと考えた。

#### ・太一の思いはどこを向いているか。

**父**尊敬、あこがれ、誇りに思っている。父の、魚が取れるのは海があるからという考え方に対して尊敬の気持ちを持っている。父が2メートルもある大物をしとめても不漁の日が十日間続いても動じないで普段どおりにいられる事が、海の事を大事に考えているし、漁師としても立派だと太一は考えている。だから、父といっしょに海に出たいと思っているし、漁師になると思っている。「海を大切に作る人だなあ。父が死んだときはとても悲しくて絶望的だった。おとうをつぐと言うか、おとうを目標にした生き方を太一はすると思います。」というように、これからの太一の生き方を自分に重ね合わせたような表現をする子もいた。

**クエ**父を倒したクエを取りたい。死を覚悟しながらも父が戦ったクエに会ってみたい。そのクエを取って父を越えたいというような思いが太一の中にあると考えている。父がクエのせいで死んでしまっただけでうらんでいる一方で、父がその命を賭けたクエはいったいどんなすごいやつだろうと思っている。偉大な父を越えたクエをしとめて父に勝ちたいと思っていると思う。

**漁師**これについては、「父を向いている」と「クエを向いている」という意見との重なりが多かった。子供の頃から父のような漁師になりたいとか、父がやぶれた瀬の主であるクエを取りたいからとかいう重なりである。漁師を目指そうとしたきっかけは父にあったから、漁師を目指すのは父のような存在が強烈に太一の心の中に刻まれているからと考えられる。しかし、クエを取ろうとする思いは、父の死が引き金となっている。父が生きていた頃に思っていたクエとは明らかに思いが変わってきている。

**海**太一が海を好きになったのは、海で生きる父にあこがれ、自分も父のようにこの海で生きていこうとする思いがあったからだと考えていた。

太一の思いと父の思いに共通することは、どちらもクエに向いているということである。それも、太一の思いに強く残っている。父を倒したクエを取るということが、父を意識していた結果であり、漁師をめざす太一の最終目標とも言えるものである。言い換えれば、クエを取ることで父を越えたいという、父を意識しての思いと考えたのであろう。

#### ・太一の思いがどのように変わっていったか

1の場面で太一が見ていたものが2~4の場面で何をどのように見るようになったのかを考えさせた。つまり、2~4の場面での太一の気持ちの変化を1の時と比べながらどのように変わっていったかを見たのである。また、その太一の思いが父の思いとどのように交わっていくのか、そして交わるのかを見たのである。

父のようになりたいという思いが死んだ後も強い。父がもぐっていた瀬で漁師をしている与吉じいさに弟子入りし、父と同じような環境で修行して父のようになりたい。その瀬で漁をすることで父といっしょに漁をしているような気持ちになれたんじゃないかな。父のそばにいたい。そのために与吉じいさに弟子入りした。与吉じいさに弟子入りした理由は、父の海で漁ができるということ。もう一つ、与吉じいさの考え方は父の考え方に似ていて尊敬できると考えているから。

父が死んだあたりの瀬に行ってみたのは、父を倒したクエに会えるかもしれないと思ったから。20キロくらいのクエには興味をもてなかったのだから、父が倒されたような大きなクエに出会うことを願っている。

与吉じいさは村一番の漁師と認めているけど、太一は納得していない。懸命に夢を追いかけるために一人前の漁師になろうと修行している。そして、もぐり漁師を目指している。1の場面では父に向いていると思ったけど、だんだん海に向いてきていると思った。

村一番の漁師になって太一が変わった。

父が死んだ瀬で漁師をしている与吉じいさに弟子入りしたことから、父が死んだ瀬を意識しているし、父が漁をしていた海を感じたいと思っているのではないだろうか。父といっしょに漁に出ることを夢見ていた太一にとって、父のいう言葉「海のめぐみだからなあ。」は太一の心に響いているはずである。父の存在を大きく思っているから与吉じいさの言葉「千匹に一匹。」とのつながりを感じて、「海」そのものに何か考えを見出そうとしている事が考えられるというようなことを子どもたちは考えた。

「とうとう父の海にやってきた。」の「とうとう」という言葉から、「ついに」や「やっと」というような長年思い描いていたことを実現できた喜びが見て取れる。「父の海」という父が漁をしていた海を一言で表すことで父への思い入れも理解できる。

しかし、2メートルもある大物をしとめても普通にしていた父が命を賭けたクエ、敗れはしたが必死で戦ったクエに太一は、一番思いが向いていると子どもたちは考えていた。「とうとう」やってきた父の海で20キロのクエには興味をもてない太一が見たいものはやはり、父を倒したクエであろうと子どもたちは考えたのである。そのクエに勝ちたい。父よりも上にあるクエに勝つことによって父を越えたいと願う太一の気持ちを想像することができる。

父と海に出る夢を持った太一。与吉じいさの言葉から父を思い出す太一。父が死んだ瀬にもぐる太一。父を倒したクエに会いたい太一。だんだんと自分の夢が実現に向かっていくことに喜びを感じているのではないかということになった。

このような太一と父の思いを比べる授業の設定によって、子どもたちは、太一と父の接点を探りたいと考えたり、父にはない太一の思いに迫っていかうとしたりしたのである。

### 3. 「意味と内容」がひろがる場面

1の場面で太一の思いの向いていた方向が、「父」や「漁師」、「クエ」、「海」と広い範囲に向いていたのが、2~4の場面と進んでいくにつれて、「父」「漁師」「クエ」が、限りなく「父」という方向に集約されていく。漁師をめざすことも、父といっしょに海に出るという幼い頃に持った夢から来るものであり、クエを取ろうとすることも、2メートルもある大物をしとめても自慢しない父が命を賭けたクエがどんなものかを見てみたい、父が夢中になったものとしての捉えがあるからだろう。また、与吉じいさに弟子入りしたことも、与吉じいさが父が死んだあたりの瀬に一本釣りに行っている漁師であることも関係している。与吉じいさの「千匹に一匹」という言葉も、父の「海のめぐみだからなあ。」という言葉に通じるものである。

だから、太一の一連の行動の集大成が父を倒したクエに向いたのであるから、クエに向かう太一とクエに倒れた父を比べる学習がこの場面が一番ふさわしいのではないかと考えたのである。

そこで、本時では、「太一は父を越えたのか。」という課題とした。父がクエを取ろうとすることをどう考えていたのか、太一はクエを取ろうとすることをどう考えていたのかを考えるであろう。また、父がクエを取ろうとして敗れたことと太一がクエを取ろうとして取らなかったことを比べて、太一の取らなかったことがどういうことを意味するのかを追求していったのである。

「太一は父を越えたのか。」という極めて局所的な課題を解決しようとする事自体、そこからひろがる物語の新しい世界があり、意味と内容がひろがる場面と言える。視点は、太一がクエを海の命と思うことで取ることをあきらめた一点に絞られてくる。そこでは、父の思いと父の言葉「海のめぐみ」、太一の思いと太一の言葉「海の命」の意味の比較をすることになる。

取ろうとして死んでいった父は、取るのをあきらめた太一よりも男らしくて立派であるという意見

もあった。しかし、太一が夢を捨てたのかというところではない。太一の少年時代からの「夢」に出会い、取らなければ一人前の漁師にはなれないと思う太一が、そのクエを取ることを選ばなかった。取るという「夢」をかなえようと試みることはいくらでもできたところである。しかし、「夢」を選ぼうとしなかったことによって、「夢」を捨てたのではなく「夢」よりも大きなものを手に入れたところに、太一の成長が感じられる。このことについては、視点を魚に移した時に、この大魚は、太一にとって、海とともに生きてそして海に帰っていった父であり、与吉じいさであり、海にすむすべての生き物や今まで取られて死んでいった「命」の象徴であると捉えていったことから、「海の命」という言葉のすばらしさを子どもたちは感じ取っていった。

何が何でもとるとのことやたくさん取るということが漁師だということではなく、瀬の主であるクエを取るということが海の命そのものをとるとのことにつながると太一は考えるようになったのである。「海のめぐみ」を受け、巨大なクエをとることが父に近づき、父を越えることだと考えていた太一にとって、夢を実現するチャンスを自ら逃したことは、「海のめぐみだからなあ」、「千びきに一びきでいいんだ」という父や与吉じいさから聞いた言葉を本当に理解し、父や与吉じいさを越える漁師になった事を意味するのではないだろうか。より大きなものをとるという感覚は根こそぎとってしまうような、海に存在するあらゆるものの命を奪ってしまう考えにつながる。海の命を守るという見方ができるようになった太一は、もちろん、村一番の漁師であるだろうし、「生涯だれにも話さなかった」太一は、そういう考えを貫き通したと捉えられるし、海の命を守り続けたとすることができる。

大きな魚を取った時に出た「海のめぐみ」という父の言葉と、「千匹に一匹」という与吉じいさの言葉を守り続ける太一が大魚に出会ったとき発した「海の命」という言葉を同じように捉えている子が多かった。大魚に出会うまでの太一は父の考え方を受け継いでただがむしやりに海のめぐみを受けるという考え方だったが、大魚をやっとの思いで取ることをあきらめた時点で海を守るという考え方と与吉じいさの「千匹に一匹」という考え方を本当に理解した瞬間だったのではないかという考えに子どもたちは変化していったのである。

人間は、夢を持ち、夢に向かって進む。いろいろな人に出会い、いろいろな出来事に出会う。この作品と絡めて考えると、人間の成長には、太一にとっての父や母や与吉じいさのように、自分の周りにいる人間との関わりが大きく影響している。また、将来、クエのような、生き方を左右するような出来事にも出会うことだろう。自分の生き方を見つめ、自分の周りにはいる人々の存在に気づき、「生きる」ということの意味を見つめなおす話し合いが次の「意味と内容」のひろがる場面となると考えている。

#### 4. 成果と課題

成果としては、授業の中で物事の本質や価値観など、追いつめていくべき対象に迫れる糸口を子どもたちの発言の中から見つけ出し、立ち止まり、考え、授業の場に乗せていく「意味と内容のひろがりの始まり」を授業の時間ごとにつかむことができたと考えられる。

また、今後の課題として、自分が持った考えを友達と交流しながら、考えを比べ、自分の考えと似たところと違うところを意識し、どこが違うのかを考えることで友達の意見のよさを認め、生かし、自分の考えを再び作り上げて友達に返していく繰り返しの中で、クラスの友達の意見を吸収した自分の意見を作る力を持たせることである。それが、お互いの考えのよさを認め合う心の通い合うものとなり、主人公の生き方を通して自分の考え方を修正していく場となる。主人公の生き方についての考えを学ぶという視点に立つのではなく、自分の生き方についての考えに主人公の行動や言葉がどのようにかかわっているかを意識しながら話させることが重要となってくる。主人公の生き方や考え方についての共有したまなざしが自分の思いを話すときにも見えるように、物語の中から根拠を示しながら、「自分の考え方は・・・。」や「ぼくは、こう考えているんだけど、主人公の考え方を生かすと・・・。」など、「自分」というものが中心となった話し合いの交流にしていきたいと考えている。